

郷土館だより

Vol. III No. 1

1980. 8. 1



東海道五十三次之内 三島 (広重)

目次

テーマ展案内	1
郷土史の散歩道(7)	3
資料紹介	4
行事報告	5
寄贈資料紹介・おしらせ・その他	7

テーマ展「三島の道」 ～東海道の旅と宿場～

郷土館の今年のテーマ展は「三島の道」です。おもに江戸時代の東海道をとりあげてみました。江戸の人々の風俗や三島の町の様子が変わります。夏休みなどの機会に、ぜひ子供さんとごいっしょにおでかけ下さい。

期間 7月1日～12月10日（第1月曜は休み）

コーナータイトル 主展示品

三島の道……………東海道分間絵図

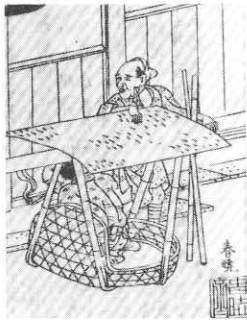
箱根路……………箱根路地図と写真

交通施設……………三島本陣史料

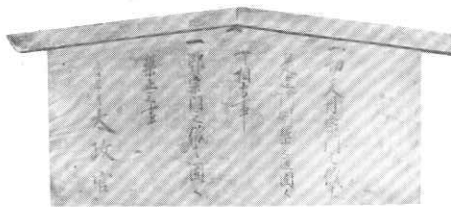
江戸時代の旅…旅の持物(矢立・持仏等)

運搬具……………はさみ箱、馬の鞍等

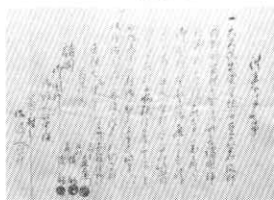
村の道・道の神…村地図、サイの神パネル



客を待つかごかき人足と山かご



高札場は三嶋大社前にあった



手形を持たないと関所は通れない

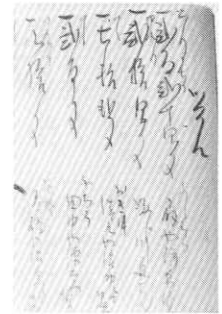
道

「み・ち」の語源説によれば、みちの「み」は事柄を美しく言うための音であって、本来の意味は「ち」にあると言われます。ちはあっち、こっちのちと同じ意味で、漠然とある方向、方面を指している言葉です。

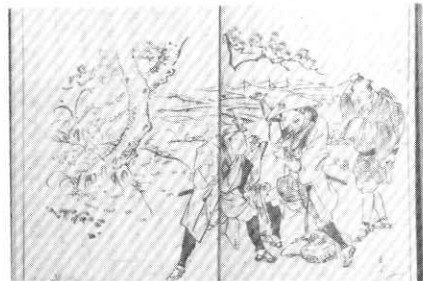
鹿道しかみちから人間の道へと発達してきた道は、人間の文化の交流に大きな役割を果たしてきました。西に芽ばえた文物は東へ、北に芽ばえた文物は南へあるいはその逆に、四方八方、道が延びている限りあらゆる方向へと移動拡散したのでした。

このように、道の発達と文化の向上とは密接な関係があります。道の無い所には、文化は入らず、育たないとも言えます。

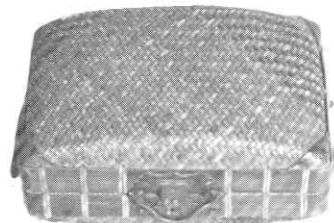
私たちの町三島は、東海道という日本の大動脈の上に発達してきた町です。江戸時代の三島を、道との関連で展示再現させてみたのが、今回のテーマ展です。



道中日記「富士川舟賃 二十四文」と記す。



膝栗毛のやじさん・きたさんは伊勢参りの旅



弁当入れ



東海道分間絵図(三島)

三島の道

三島は古くから陸上交通の要地として栄えた所です。東西には東海道が、南北には三島を起点にした下田街道と佐野街道が通っていて、ちょうど東西・南北両道の交差する四つ辻に発達してきた町であったからです。

東海道は江戸時代に入って急速に整備が進み、以来日本の主要道としての役割を果し続けています。特に江戸時代には、文化の流れは、それまで京都(西方)からの一方的な流れであったのに対して、江戸開府以後は東西の交流が頻繁になり、三島のような宿場町には両方向からの文化が流入し、大きな影響を与えたのでした。

こうして三島に入った中央の文化は、さらに北海道へと流れこみ、伊豆や北駿の地方へと伝播して行ったのでした。

三島の道を通じたのは中央の文化だけではありませんでした。地方から出て中央へと流れて行ったものもいくつかありました。三島暦は、三島で作られたものですが、室町期には京都の京暦も「三島」と称され販売されたと言われています。これは、三島暦が版暦(印刷暦)としては京暦よりも古く、技術的にもすぐれていたからでした。三島文化の代表的なものと言えるでしょう。

民間信仰の代表、道祖神にも興味ある分布が見られます。三島や伊豆半島には極めて少ない双体道祖神は、三島市北部から裾野・御殿場にかけては目だつようになり、さらに山梨、長野に行くと双体道祖神が主流となっています。このことは北面ルートを通じての民間信仰の南下分布とは言えないでしょうか。

このような東西・南北二本の道が交差している上に発達してきた三島、その四つ辻文化を考へてみることは、三島をより深く理解するために必要なことだと思います。

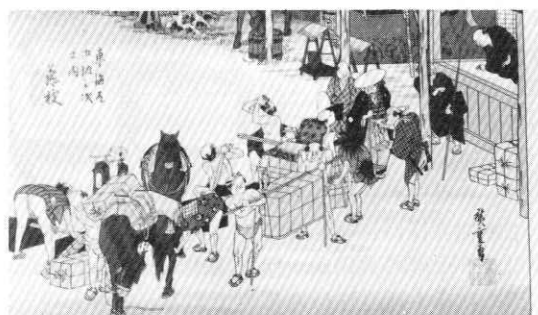
箱根路

箱根路は、足柄路に代って、質量共に東海道の本流になったのは、鎌倉開府以後のことでした。

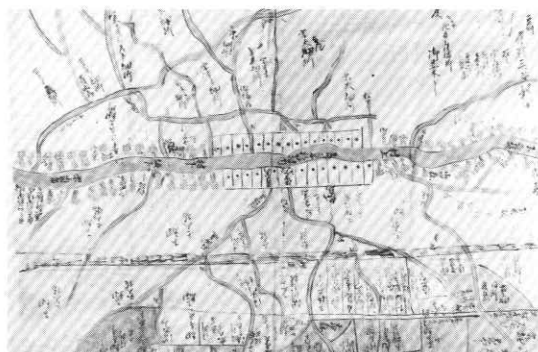
箱根は急速に開発され、関所が設置されたり、箱根宿や西麓の五ヶ新田が開かれました。しかし急坂が多く、関所もある箱根路は東海道の難所として知られ、旅人の難渋する道でした。

箱根山の西の登り口、三島宿は箱根路の開通ともなって発達してきました。

現在も、三島から箱根に至る街道沿いには、江戸時代の街道風物を多く残しています。



写真は藤枝宿人馬継立の図。三島の伝馬所は今の中央郵便局あたりでした。



三ツ谷新田は箱根路西麓の五ヶ新田の一つ。松雲寺は寺本陣として大名なども休んだ所です。



急坂をあえぎながら登って来る馬を見て、江戸の加勢屋与兵衛は接待所を開設しました。

郷土史の散歩道 (7) 戦国の三島

1. 岳南の史的意義

何時の世も、三島の在る岳南地域は、日本歴史の重要な舞台になって来た。

ことに、治承4年(1180)10月20日の「富士川の対陣」は、まさに源平争覇の「天下分け目」となっている。

また、建武2年(1335)12月12日の「箱根の戦」は、足利尊氏と新田義貞の決戦であった。それは、鎌倉以来しを削る抗争を続けて来た、両氏の最後の決着でもあったが、それ以上に「建武中興」の實質的な成否をかけての皇武決戦であった。いわゆる「天下分け目」である。

戦国時代もまたその通りで、やはりこの岳南地域が、表裏にわたって天下の檜舞台となっている。

ご承知の様に、戦国時代のこの地方は、駿河の今川氏・甲斐の武田氏・伊豆相模の後北条氏が三つ巴の抗争を繰り広げた舞台である。とりわけ、武田対北条の死闘は峻烈を窮め、我が三島も、有史以来最大の戦禍を受ける結果となった。

しかし、この謀略と戦略の限りを尽した、「岳南三国志」とでもいうべき攻防も、永禄3年(1560)義元の討死に依り、先ず今川氏が脱落した。

次いで天正10年(1582)勝頼の自刃により武田氏が滅亡した。最後に残った北条氏も、その8年後には、小田原の落城を以て姿を消して行くことになった。まさに乱世の倣いである。

ところで、武田信玄も北条早雲も、風雲に乗じて志を遂げた一世の英雄である。騎馬戦においては日本一と称され、信長や家康を驚怖させた信玄は、あるいは戦国一の勇将であったかもしれない。また、「早雲寺殿21ヶ条」等に見る早雲の治世は、日本一流の水準であったろう。

しかし、当人はもちろん、その子孫もついに天下人にはなれなかった。むしろ、2氏抗争の隙を盗んで漁夫の利を占めたのが、織田信長ではなかったろうか、つまり、岳南の地における両氏の抗争こそが、実は「天下分け目」であったと思われる。

2. 戦国と三島

戦国時代における、三島付近の主な事績は、

天文13年……今川義元長窪城(長泉)を攻む。
永禄元年……北条氏康泉頭城(清水)を築く。
同 12年……北条氏康兵を三島に出す。
同 年……武田勢三島に乱入放火する。
この頃北条氏山中城を築く。

天正5年……武田勝頼新に沼津城を築く。
同 7年……北条氏直三島に陣し沼津を攻む。
同 9年……北条氏直三島に出陣。
同 14年……徳川家康北条氏政と三島に会盟。
同 18年……山中城の戦(豊臣秀吉小田原攻め)となっている。



山中城跡

この間三島が何回兵火の災を受けたか判明しないが、最大の被害は永禄12年6月17日であったと思われる。記録に依ると、この日武田軍は後の鎧坂に陣を敷き、宿内に乱入した兵は暴虐の限りを尽くし、ついに大社をはじめ宿内のほとんどを焼き払ったという。

ところで、この乱世に三島から(他の岳南地域も)名ある武将は1人も出ていない。

御園と関係の深かった笠原新六郎も、徳倉城(清水町)城主として、岳南戦国史の1頁を担ってはいるが、北条氏の重臣「松田家」の出で、三島生まれではない。

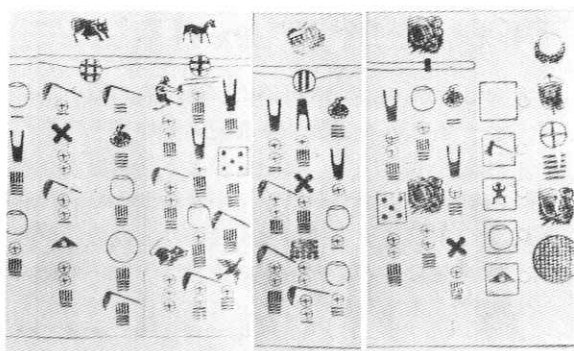
もし、三島に信玄や早雲に匹敵する武将が出ていたら、果して三島の戦国史はどうなったであろうか。(戦国時代は、早雲の伊豆侵入を以て幕が明けられた、といわれているので、これは大きな意義を持つことになったかもしれない。)

とにかく、岳南の地は、天下の檜舞台にはなったが、その主役も、そして主な脇役も1人も出ていない。これは一体どういうことであろうか。

館長 長谷川福太郎

資料紹介 (館蔵品)

■展示資料見学の手引

た やま れき
田 山 暦

2階展示室の三島暦のコーナーに常設展示している「田山暦」をご紹介します。

田山暦は、岩手県二戸郡安代町田山で作られ、その地名が暦の名称になったものです。正徳の頃(1711~1715)、田山善八という人物の創案とも伝えられ善八暦^{ぜんぱちれき}という呼称もあると言われます。

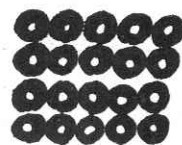
この暦の特徴は絵暦であるということです。暦頭の年号から暦注に至るまで、すべて絵か記号で記されています。したがって現代人の私たちが田山暦を読もうと思っても容易ではありません。旧暦の知識が基礎にあった江戸時代の人々にとっては、絵を見れば何の日かはすぐ判断がついたものと思います。

ところで、こうした絵暦は、全国でもそう多くなく、大変めずらしいものと言えます。有名なものには会津暦、盛岡暦などがありますが、その外には沖繩砂川暦^{さかづか}があげられる程度です。主流となっていた暦は、やはり三島暦、伊勢暦等の文字暦でした。絵暦が作られるようになった理由には、一つには当時の文字の普及と密接な関連があったと考えられます。文字を知らないものでもすぐ読めるような暦を必要としたことから工夫創案されたものでしょう。こうした理由から、絵暦を文盲暦^{ぶんまろ}と呼ぶ人もいます。

田山暦は明治初年頃まで発行されていました。



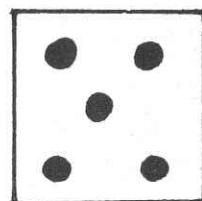
七月 小の月



錢二百十文で二百十日



八月 大の月



膳に団子で彼岸

当館展示の暦は、三島暦師家の河合宅で発見されたものですが、日本では数少ない田山暦として価値あるものです。

写真には、田山暦の暦頭^{れきとう}とちょうど今の季節に当る部分の暦注^{れきちゅう}を出しておきました。二、三の暦注解釈をしてみましょう。

暦頭一行目は年号である。一番上は太陽の絵で「天」、二番目は舟の帆で「保」と読みます。三番四番目は数字を表わし、「十五」、五番目は十二支の竜で「辰」、最後は農具の筵^{とうし}で「年」と読みます。続ければ、天保十五辰年になるというぐあいです。

次に暦注の方を読んでみましょう。天保十五年の七月は今の暦で言えば、八月から九月に当たります。☉(七月)の暦注の中に☼という絵がありますが、これは、錢二百十大の絵で二百十日のことで、☼(八月)に☼というサイコロの玉のような絵が見えます。これは、秋の彼岸^{ひかん}を表わすもので、膳に団子を盛った絵です。八月九日が彼岸の中日だったわけです。その外にもいろいろな絵や記号がありますが、いずれも旧暦の暦注で、現代人にはなじみのないものです。判り易いのは、鎌の絵だと思います。鎌は刈り入れ良しという意味で、この頃稲の収穫の盛りだったわけです。

杉村 齊

行事報告

～郷土館「春の映画教室」～

3月29日～4月3日（6日間）郷土館55年度テーマ展「道」を中心に児童映画も含め上映した。

～県外歴史探訪「甲州史跡めぐり」～

郷土館では年数回“県外歴史探訪”と銘打って史跡めぐりを行っている。昨年は鎌倉が中心であったが、NHKの大河ドラマの影響もあって大変に好評であった。今年は早くから、館としての年間テーマを「戦国時代」と定めて、これに関連する行事を行ってきた。三島小誌(四)「戦国の争乱」の出版もその一つである。県外歴史探訪では「甲州路探訪」と決め、館の年間テーマに即させた。その後、黒沢明監督作品「影武者」の放映と時を同じくした為かどうかはさだかではないが、この企画に対する反響は想像以上に大きなものがあった。5月10日(土)には応募者を全員集めて、「戦国時代と三島」のタイトルで講義を行った。講義には80名以上の参加をみて、大変な熱気であった。

5月13日(火)に市役所のマイクロバスで25名が現地めぐりに出発した。県外歴史探訪の目的は他所を見聞することによって三島と比較して、三島をより理解することであるが、甲州は三島と最も関係の深い武将の一人、「武田信玄」ゆかりの地である。

以下簡単に当日のコース順に説明を記し、甲州への探訪を希望している人達の参考に供したい。
(一部割愛)

○信玄堤（竜王町 本竜王）

甲斐国第一の水難場に、信玄は天文十年国主になるとその翌年から川除けの工事を起した。将棋頭、堀切、十六石、霞堤などの様々の土木工法を応用し実に二十年の歳月をかけて永世の堤を完成させたのである。これにより国中の沃野を水難から守ることができた。まさに不朽の民政事業といふべきだろう。

○武田氏館跡（甲府市 武田神社）

永正十六年、武田信虎は石和の館を引払って、躑躅ヶ崎に新しい館を構えて移り住んだ。新しい府中（甲府）の誕生である。館跡は周囲に土塁と堀をめぐらし、郭内は東曲輪、中曲輪、北曲輪からなっている。

入場者数（約）

3月29日(土)	50人	4月1日(火)	50人
30日(日)	120人	2日(水)	60人
31日(月)	30人	3日(木)	130人

○善光寺本堂（甲府市 善光寺）

定額山善光寺は、武田信玄が川中島の戦いで兵火にかかることを恐れ、本尊阿弥陀如来を請来して、永禄不年に開創した。そのとき信州善光寺の百七代鏡空上人を開山として甲斐に迎えた。現在の本堂は宝暦の火災後再建をはかり、寛政八年八月完成を見たもので、信州の善光寺と同一形態の大伽藍で、木造建築としては日本第四位である。

○恵林寺庭園（塩山市 恵林寺）

恵林寺の庭園は、元徳二年この寺を開いた夢窓国師によって築かれた。借景として遠く乾徳山と笛吹川筋の村落を取り入れている。上下二段になっており、上段を枯山水とし、上段には池泉回遊式の心字の池が配されている。随所に奇岩奇石が配され、幽遠の趣が深い。

○孫子の旗（塩山市 恵林寺）

紺地の絹に金文字で、中国の兵書「孫子軍争編第七」の言葉が大書してある。武田軍が常に陣頭に立てた軍旗で、旗の文字は信玄が敬愛した恵林寺の快川国師の書といわれる。最近「風林火山の旗」と呼ばれて一般化されている。

○快川国師画像（塩山市 恵林寺）

天正十年四月、織田の兵火に包まれた恵林寺の三門楼上に「心頭滅却すれば…」の有名な偈をのこして武田氏に殉じた快川国師は、戦国期を代表する傑僧として戦国史に一頁を飾った。天文二十四年から弘治二年までと、永禄七年～天正十年までの恵林寺の住持であった。

○武田不動尊像（塩山市 恵林寺）

伝によると、天文二十年、信玄三十一歳のとき比叡山から大僧正位を贈られ、その記念に京の仏師康清を招いて自らの体を模刻させ、等身大の像をつくらせた。その際髪毛を漆にまぜ、自らの像の胸に塗りこめ、彩色をほどこしたと伝えられている。

■社会教育と郷土館

社会教育とコミニティー施設を考える時、古き良き時代の施設が高度成長等時代の変遷に伴いその幾つかが消滅して行った事につかる。庶民のコミニティーは裏町の細い通路、小さな遊び場、祭りに代表されて来た。これらの場が車社会等で失なわれているのに気がつく。国民生活が高学歴や経済的な豊かさの中であって人々は生きがいを求めるようになり、生涯教育が叫ばれるようになってきた。精神(心)的豊かさが要求される時、芸術や文化の遺産が行政によって確保される事を期待するのも当然の事といえよう。昨今、地方の時代

行事報告

～体験講座「草木染めと毛糸つむぎ」～

富士の白雪がとけて湧き出た水は、三島の町の中を幾筋にも流れて、この湧き水を使って数多くの紺屋とその下職がありました。西洋から化学染料が入って来た明治の中頃までは、染料は「染め草」と言って草根皮が使われ、最も多く使われたのが藍染でした。しかし、染色も工業化されて紺屋職人の長い経験による勘やコツによる染色は不要となり、三島の紺屋とその下職の数もだんだんに減って、昭和の初期には、紺屋の土間に藍ガメを見ることはできなくなりました。

郷土館では、5月11日(日)市内で染めや織などを熱心にやっている、井上一雄氏を講師に招いて、古来の染色法と手作りの技術を習得してもらう目的で体験講座を開催しました。

～体験講座「竹の玩具作り」～

近頃では、竹の玩具で遊んでいる子供たちを見かける事がほとんどなくなり、小刀で鉛筆を削る機会もなくなってしまった現代っ子には、小刀の使い方は苦手のようでした。遊び道具を自ら創作する喜び、そこらにあるものを利用して遊ぶ喜びを見つけ出す事もなく、物質的に余りにも恵まれすぎている現代の子供たちには、創造力の世界も逼塞してしまうのではないのでしょうか。

郷土館では、5月25日(日)長島一美氏(三島農協職員)を講師に招き、市内の各小学校生徒(6年生)を対象に、幾つかある竹の玩具の中から竹とんぼと紙鉄砲をとりあげて、体験講座を行ないました。

が唱われる中でも文化は大きな課題の一つである。

しかし、地方自治体での文化施設は、財政力とも関連して中々希望通りとは行かない。それでも三島市の文化財に限れば、遺跡として山中城は文化庁でも注目し完成と言えぬまでも、市政40周年を機に開所の運びとなったが、民俗資料と言え「郷土館」でその保存に努力を求められている。展示、収容力等で問題なしと言えないが狭隘になりつつある館を如何に市民の学習、知識、情操教育、創造力の培養の場とするか、幾つかの問題点を改良しながら前向きに尽力して行きたいと思う。

三島市社会教育課長 榎原時之助

○草木染め

あらかじめ用意しておいた矢車の染料の中に、ブロード地(さらしたものを)を浸し(三、四番染料)次に鉄分を溶かした媒染液に布を浸す、続いて一、二番染料(さらに濃いもの)に再び浸し、次に媒染液に浸して色を定着させ、日陰に干す。この作業によって白い布は渋いねずみ色となる。

毛糸つむぎは、染色した羊毛をカードにかけて繊維をそろえ、紡毛機にかけて毛糸にする。



紡毛機で毛糸を紡いでいる

新聞紙を水につけてまるめ弾丸を作り、紙鉄砲の筒の中に詰め込む「パーン！」と音をたてて飛び出してくる竹の玩具を手にしなが、子供達は、大はしゃぎでした。

○竹とんぼの作り方

太い竹を使い、節のない所を羽根の長さ(だいたい11センチ位)に切り、幅1.5センチ~2センチ位に割る(太い所なら1本の竹から8枚位、羽根がとれる)次に羽根の中心に小さい穴をあけ薄い羽根の作業にとりかかる。

竹とんぼの「ベコ」は、割バシのような形に竹を割ってから、竹のかどを少し削りとり羽根の穴へさし込む。「ベコ」の寸法は、羽根の全体の長さよりも少し長くしたものを作る。

■寄贈資料紹介■

No.	資 料	点数	住 所	氏 名
1	徳 利	1	沼津市口野98	田 内 弘 子 氏
2	焼酎壺	2	"	"
3	扇風機 (農具)	1	"	"
4	雛人形	3	"	"
5	撚りかけ車	1	"	"
6	蠅取り器	1	"	"
7	秤 り	2	沼津市大門町33-8	早 川 き み 氏
8	ルバン	4	"	"
9	ファイゴ	1	"	"
10	延し機	1	"	"
11	分析鍋	1	"	"
12	米びつ	1	三島市沢地127-1	東 はる子 氏
13	中郷村古図	1	三島市梅名171	渡 辺 恵 作 氏
14	中郷老人クラブだより	1	"	"
15	裁着け	1	三島市芝本町12-23	渡 辺 正 也 氏
16	足踏脱穀機	1	三島市清住町13-10	高 橋 敬 氏
17	唐箕	1	"	"
18	扇風機 (農具)	1	"	"
19	二人放り (馬鍬)	1	"	"

(昭和55年4月~7月)

★★★★★おしらせ★★★★★

■郷土館の行事予定■

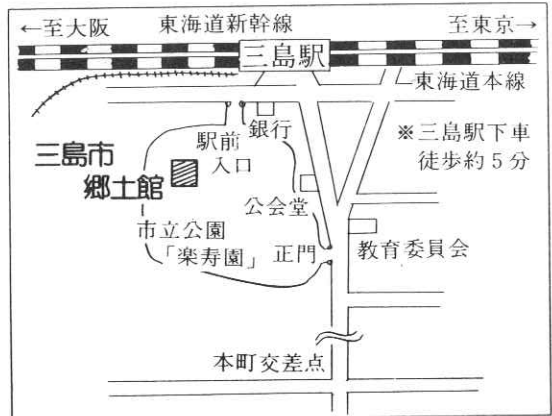
- 7月1日(火)~12月10日(水)まで
テーマ展示「みしまの道」
~東海道の旅と宿場~
- 8月1日(金)~8月7日(木)
「夏の映画教室」(8月4日は休館日)
- 少年教室「縄文土器作りの体験学習」
中学生を対象に4日間行なう。
8月1日(金) 用土作成
8月5日(火) 土器の成形
8月14日(木) 土器の文様づけ
8月28日(木) 焼きあげ(野焼き)
- 9月28日(日) 民俗学講座
- 10月24日(金) 市内史跡めぐり
(申し込み受付は、10月1日より)
- 11月9日(日) 県外歴史探訪
~甲州史跡めぐり~ (未定)

■刊行物案内■

- 三島小誌(四)「戦国の争乱」 <頒価> 700円
- 三島小誌(別冊)「ふるさと探訪」
<頒価> 500円
- テーマ展「みしまの道」 <頒価> 200円

利用案内

休 館 日 毎月第1月曜・12月27日~1月2日
開館時間 午前9時~午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.7

昭和55年8月1日発行
(年3回発行)

編 集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228
発 行 三島市教育委員会